

いつまでも若く元気な彼女の母が「京子の部屋」を切盛りする姿を娘として誇らしく見て来たように、自分も息子にお母さん頑張っているねと言ってもらえたら、自分の選んだ道。いろんなことがあっても今まで続けてこられた幸せ。「あきらめないで続けること」「生懸命やること」「その機会に感謝すること」「三つの事を行動で息子に伝えたい。母と子の二人の生活をしながら、二人の女性として立ち返れるのは絵を描くことだ」といふ。これが私。感謝の想いを胸に作品に向かう。日本国内の



ありがとう

く。昔の絵は荒くてガチガチしていた。現在は以前に比べて柔らかくなっていると微笑む。息子を産んだことに変化してきている。絵を「ママのお仕事」と言ってくれる息子の笑顔が嬉しい。「ママ頑張るね」と答える。

展覧会で入選、受賞。東京、福岡、沖縄、京都と日本各地で展示の機会に恵まれた。海を渡った彼女の作品はアルゼンチン、ベルギー、パリ、ニューヨークなどでアートフェアやアートショップに並び、海外で個展も計画されている。

いつかアトリエで

設計事務所で働き生活の糧を得ている。事務の補助の他に図面などの細かい作業。仕事を終えると幼稚園に子どもを迎えに行く。小さかった息子は小学校1年生になった。ここ数年は寝食を忘れて描くことは無かったが来年に向けてもう少し描けたらと考えている。アトリエを持ち展示をもっと前向きに頑張りたいと語る彼女。いつか絵だけで食べていけたら幸せ。作品は彼女と息子の住まいに保管し、大きな作品は廊下にあるのだと笑う。「飾って下がる場所があれば」と言った彼女が片付けをしていると、撮影場所であるREPORTのオーナーが彼女に「飾らせてもらえませんか」と声をかけた。飾る絵が欲しいと思っていたという。最初から存在していたかのように彼女の作品はお店の雰囲気と合っていた。口にした願いが叶う素敵な瞬間、彼女は驚きながら嬉しそうに微笑んでいた。



好きなことをする
感謝して願って
今を未来を生きてゆく



ライター
CHIKA
信州在住・佐世保は第二の故郷
ブライダル・イベント・式典MC、ナレーター、ラジオ放送作家
mc_chika_love_wedding@yahoo.co.jp

女性は世の中の「花」だから。

月刊「はなはな」が創刊当初から伝えたい想いです。
「はなはな人」を読み終えたあなたが一人の女性として
あなたの場所で咲くエネルギーになったら願っています。

大きな絵

弥生の曇った日、彼女の声質と穏やかな口調に惹かれ、それから運ばれて来た作品にびびりした。大きく想像以上に長い。和室にあるものに似ている。まさか。「これ...ふすまに似ていますね?」ドキドキしながら尋ねると「はい、襖です」と返事が返ってきた。「襖屋さんに特別注文で作ってもらっています」と興味を掻き立てられるには充分な笑顔だった。

美術館巡り

幼い頃から漫画を描いていたという。とにかく絵を描くのが大好きだった。十四歳の時、独りでロンドン在住の叔父を訪れる。叔父のパートナーであるイギリス人女性画家に絵画を学び、ロンドンにある数多くの美術館を回った。たくさん美術館の中で彼女の心を奪ったのはダイナミックな抽象画たちだった。同時に浮世絵展や水墨画展が開催されているのに興味を持った。素晴らしい作品に心惹かれて、日本独自の文化が海を渡り世界で高く評価されている現実を目の当たりにして衝撃を受ける。そして日本人として誇らしさを感じた。抽象画と



墨絵。日本から遠く離れた場所で、十代の彼女の胸に生まれた小さな芽は後に大きく育ててゆく。

今描きたい

美術部に入ったが行かなかった。独りで黙々と描くのが好きだった。自分で展示して人に見せたりするタイプではないと思っていた。趣味として描き続けていたある日、縁あって沖縄のアートスペースでもあるカフェ「コトノハ」で飾ってもらってから自分の作品が他の人の目にどう映るのか興味が出たという。彼女が表現する独自の世界は、見る人の感性でいかようにも捉えられるのだろう。どんな想いで作品を創り上げるのか。「おりにくる」瞬間が来ると描きたくなる。彼女は言う。衝動のまま作品に向かい手を動かす。集中してしまうと時間が分からなくなる。食はず眠らず描く。気が付いたら朝が来てしまう。

ループル美術館

体調を崩し精神的に描けなくなった時期があった。長いトンネルの途中で、お店のデザインをやった

みないかと声をかけてもらった。描けないと分かった上でのオフアだった。二十六歳頃から襖に描くようになる。子どもの頃に感じた異なる二つの美しい世界、中世ヨーロッパの抽象画と日本美術のひとつである伝統的な水墨画の世界を融合できないか。日々模索を続けながら襖や掛け軸の上に描き続けた。そんな彼女の生み出した作品が、海を越えてループル美術館に展示されると聞いた時には胸が高鳴ったという。ロンドンで作品を見上げていた彼女が、いつしか見られる側になっていた。

ママのお仕事

沖縄、東京、福岡などで個展を開催してきた。二年前の夏、アルカス佐世保で初の地元個展を行う。今は展示が精一杯と語る彼女が、大事にしているのは幼い息子との時間だといふ。毎日絵に向かうことはできない。それでも大きな作品を描く時には両親が息子を預かり応援してくれている。自分の精神的な弱さを兄が正して支えてくれる。家族の協力があつて好きなことを続けていられる。今、本当は毎日でも描きたい、でも描けない。やっと作れた時間に溜めたエネルギーを一枚にぶつける。睡眠時間を削りアクリル絵の具で手を荒し、何ヶ月もかけて描

はなはな
人

「とけてひとつに」



墨絵
岡崎 亜李沙 さん

TEL:080-5806-8989
HP <http://www.arisaokazakisumie.org/>
Facebook
sumi-e-japanese-paintings-ARISA-OKAZAKI